様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ３０ 日現在

機関番号：３２４２１
研究種目：基盤研究(B)（海外学術調査）
研究期間：2011～2014
課題番号：２３４０２０６３

研究課題名（和文）日系国際児の日本文化の継承と文化的アイデンティティ形成および教育支援に関する研究

研究課題名（英文）A study on inheritance of Japanese culture, cultural identity and educational support of intercultural children with Japanese ancestry

研究代表者
鈴木　一代（SUZUKI, Kazuyo）

埼玉学園大学・人間学部・教授

研究者番号：４０２６１２１８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　6,300,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、海外の日系国際児（一方の親が日本人、他方が外国人の子ども）に必要な教育支援について明らかにすることを目的とする。調査参加者は、アジア（インドネシア）で成長する日系国際児37人とヨーロッパ（ドイツ）で成長する日系国際児32人の合計69人（10代後半から30代前半）だった。フィールドワークおよび半構造化面接による詳細なデータの収集や分析をおこなった。その結果、言語・文化の継承（習得）および文化的アイデンティティについて、両国の日系国際児の共通点および相違点を明らかにし、教育支援を明示した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the educational support for intercultural children with Japanese ancestry (children who have one Japanese parent and one non-Japanese parent: ICJ) living overseas. The participants were 69 ICJ (late teens - early thirties), namely 37 Japanese-Indonesian children living in Indonesia (Asia) and 32 Japanese-Indonesian children living in Germany (Europa). Fieldwork and semi-structured interviews were employed. The analysis was mainly qualitative in nature. The results showed the common points and differences between Japanese-Indonesian and Japanese-German children concerning the inheritance of language and culture as well as cultural identities. Furthermore, the educational support for ICJ was suggested.

研究分野：異文化間心理学・異文化間教育学

キーワード：日系国際児　文化的アイデンティティ　日本語・日本文化継承　教育支援　国際結婚家庭　青年期以降　異文化間教育学　インドネシア：ドイツ

１．研究開始当初の背景

グローバリゼーションの中で、1980 年代後半以降、日本人と外国人の国際結婚の急増、それにともなう国際児（国際結婚の親をもつ子ども）の増加が著しい。日本において、両親のどちらか一方が日本人で他方が外国人の子ども（以下、日系国際児）の出生数についての調査が始まったのは 1987 年だが、当時の日系国際児数は 10,022 人で国内出生総数の 0.7%に過ぎなかったが、その数は増加していき、1995 年には約 2 倍の 2 万人（1.7%）を突破し、その後も、多少の増減を繰り返しながらも、2 万人台（出生総数の 1.9%から 2.1%）を推移しており、本研究を開始した 2011 年には、20,311 人(出生総数の 1.9%)だった。国内だけでなく、海外で出生する日系国際児も多く、2011 年には、11,441 人だった。国内外の日系国際児数を合計すると 3 万人以上となり、国内外出生総数の約 3%（約 33 人に一人）になる（以上、人口動態調査）。

国際児は、出生時から、母親の文化と父親の文化という、少なくとも二つの文化と向き合い、複数文化を常に意識しながら、いくつもの要因が複雑に交差し、相互に影響し合うなかで、(文化的)アイデンティティを一生模索していくことになるため、（文化的）アイデンティティ形成は、国際児にとって、極めて重要な課題であること、また、国際児にとって、最も自然なのは、「国際児としてのアイデンティティ」、すなわち、二つの文化（国）を混合（融合）したアイデンティティを形成することであり、国際児がそのようなアイデンティティを形成するためには、二つの言語力と二つの文化の知識を習得していること、そして、国際児を肯定的に受け入れる環境の存在が不可欠であることが指摘されている（マーフィー重松，2002；鈴木、2004）。

本研究の研究代表者である鈴木一代は、1991 年から、インドネシア在住の日本・インドネシア国際児に着目し、文化的アイデンティティ形成とそれに影響を及ぼす要因を明らかにするために、CACPA [文化人類学的-臨床心理学的アプローチ]（鈴木・藤原, 1992）による縦断的フィールドワークをおこなってきた。鈴木の研究は、現在も継続しているが、日系国際児を対象にした代表的な先駆的研究である。その研究成果は、たとえば、鈴木（2004，2007，2008）としてまとめられている。鈴木（2004，2008）は、日系国際児の（文化的）アイデンティティ形成に影響を及ぼす主な要因として、「居住地（国）」「両親の国（文化）の組み合わせ」、「日本人の親の性別（母親と父親のどちらが日本人か）」、「国際児の外見的特徴」、「家庭環境」、「学校環境の選択」をあげ、さらに、国際児の「出生地」「年齢」「性別」なども要因として考慮している。また、鈴木（2007，2008)は、「国際児としてのアイデンティティ形成」の前提のひとつである日系国際児の言語・文化習得（継承）に関与する条件（要因）として、「居住国（地）の言語・文化」、「親の志向性」、「子どもの言語、文化、教育についての親の考え方（姿勢）」「家庭の経済状態/夫婦関係（家庭環境）」、および、「子どもの発達(年齢)および親子の相互作用」の 5 つの要因をあげ、国際家族（国際結婚家族）における、子どもへの言語・文化継承のメカニズム（仮説）を提示している。それによると、国際家族における言語・文化の継承は、子どもの成長（時間の経過）とともに、複数の要因が複合的・双方向的にかかわるダイナミックな過程である。

他方、鈴木（2011）は、「日系国際児のアイデンティティ形成とその支援のあり方に関する実証的研究」（基盤研究(C) 平成 20～22 年度）の研究代表者として、日系国際児の（文化的）アイデンティティ形成に必要な支援について明らかにするために、5 ヶ国（インドネシア、カナダ、イギリス、ドイツ、日本）の日系国際児（第１子、バイリンガル、小学校 6 年～中学生）とその母親 26 組、および日本人教師 18 人に半構造化面接等を実施し、多面的・包括的な検討をおこない、「国際児としてのアイデンティティ」に関与する日系国際児の二言語・二文化の習得、特に、異文化出身の母親の母語・母文化の習得に必要な支援について、「家庭における支援」「日本語教育機関における支援」「日本社会からの支援」に分けて、5 か国に共通する支援と、各国固有の支援とを明らかにした。

これまでの研究では、海外在住の主に学齢期までの日系国際児（補習授業校の幼稚部・小学部・中学部在籍）が対象だったが、日系国際児の文化の継承や文化的アイデンティティ形成に関する研究をさらに発展させ、それを教育支援へとつなげていくためには、学齢期以降の日系国際児の(追跡) 調査によって、それらを明らかにする必要性が明確になってきた。

２．研究の目的

本研究では、海外で成長する日系国際児に着目し、日本文化の継承、文化的アイデンティティに関して、生育環境（居住地の状況、家庭環境、学校環境など）を視野に入れ、フィールドワークによる詳細なデータの収集、分析、考察をおこなうことにより、日系国際児に必要な教育支援について明らかにすることを目的とする。その際、居住国や両親の文化の組合せによって、文化の継承や文化的アイデンティティ形成が大きく影響されることが指摘されていることから（鈴木、2008 など）、インドネシア（アジア）在住の日系国際児（高校生～）とドイツ（ヨーロッパ）在住の日系国際児（高校生～）のデータを収集、分析し、比較検討する。

なお、本研究における文化は、「発達過程のなかで、環境との相互作用によって形成されていく、ある特定集団のメンバーに共有される反応の型」(鈴木, 2006, p.4)、また、（文化的）アイデンティティについては、「自分

がある特定集団のメンバーとある文化を共有しているという感覚・意識」とする（鈴木，2011，p.11）。

３．研究の方法

（１）調査参加者

調査参加者は、一方の親が日本人、他方が外国人である日系国際児 69 人（調査時の年齢は 17 歳から 30 代前半；学生 43 人、就業 24 人、主婦 1 人、無職 1 人）である。 内訳は、日本・インドネシア国際児 37 人（女性 17 人、男性 20 人）、日本・ドイツ国際児 32 人（女性 16 人、男性 16 人）である。母日本人・父外国人をもつ国際児 61 人（日本・インドネシア国際児 35 人、日本・ドイツ国際児 26 人）、母外国人・父日本人をもつ国際児が 8 人（日本・インドネシア国際児 2 人、日本ドイツ・国際児 6 人）である。ほとんどの調査参加者は日本語での会話がある程度可能（程度はさまざま）な日系国際児である。調査参加者は、追跡調査対象者および補習授業校卒業生が中心であるが、スノーボール方式による調査参加者も一部含む。

（２）調査期日・場所

調査は、インドネシアとドイツで、2011 年 4 月～2015 年 3 月の間に、合計 15 回実施された。インドネシアでは、2011 年 4 月～2015 年 3 月に、合計 9 回（年 2―3 回）、各約 1 週間から 3 週間、ドイツでは、2011 年 10 月～2014 年 11 月に、合計 6 回（年 1～2 回）、各約 10 日から 2 週間だった。面接調査は一人につき、1 回から複数回おこなった。1 回の調査（面接）時間は一人につき約 2 時間から約 6 時間である。インドネシアのバリ州の K 地域、およびドイツのノルトライン-ヴェストファーレン(NRW)州の M 市において、日本語補習授業校（以下、補習校）、現地校、家庭などにおけるフィールドワークを実施するとともに、カフェ、レストラン、調査参加者の自宅等で面接調査をおこなった。また、日本に移動した日系国際児を対象に、東京近郊においても（追跡）調査をした。

（３）調査方法

①調査は、主にフィールドワークおよび個人面接（半構造化面接）からなり、多面的にデータを収集した。フィールドワークでは、「国際児をとりまく環境」やその変化を把握した（例：補習校高等部、現地高校等での参与観察、「補習校現地採用講師研修会」への参加）。半構造化面接は、フェイスシート（調査参加者や家族の属性等）と面接のガイドライン（成育歴、文化的アイデンティティ、言語・文化の継承/習得、国籍選択など）からなるが、それらの作成の際には、理論的・実証的先行研究（例：鈴木、2004，2007，2008，2011）を参照した。なお、必要に応じて、調査参加者の親や補習校講師などからの聞き取りもおこなった。

②調査の際には、調査目的および守秘義務について十分に説明し、同意（同意書）を得たうえで調査を実施した。また、日系国際児の年齢によっては、保護者の了解を得た上で調査をおこなった。調査参加者からの許可が得られた場合には、録音機を使用した。面接調査終了後には、調査の全体的な印象や感想を書き留めた。面接の際の言語は国際児の希望によって決めたが、日本語（必要に応じて、一部現地語等）がほとんどだった。なお、研究代表者はインドネシア語およびドイツ語がある程度可能である。

（４）調査結果の整理・分析

①インドネシアおよびドイツで収集したデータのそれぞれについて整理・分析をおこなった。②国際児を取り巻く環境については、これまでの両国におけるフィールドワークによって把握した事柄の確認をおこなうとともに、環境の変化にも着目した。③面接調査の結果については、調査参加者ごとに、録音内容のトランスクリプトを作成し、事例ごとに分析した。④収集したすべての面接データ（事例）を統合・整理し、日本・インドネシア国際児（以下、日イ国際児）と日本-ドイツ国際児（以下、日独国際児）のそれぞれについて主に質的な分析をおこなった。④日イ国際児および日独日系国際児について比較検討し、総合的に検討した。

４．研究成果

（１）国際児を取り巻く環境の主な特徴

インドネシア（K地域）にもドイツ（M市）にも、「国際児としてのアイデンティティ形成」の条件のひとつである日系国際児を肯定的に受け入れる環境がある程度存在するが（K地域:国際的観光地のために多様な文化的背景をもつ人々が居住、良好な日本・インドネシア関係、日本人・日系人への肯定的態度、日本語への高い評価；M市：総人口に占める外国人・移民背景をもつ国籍者の割合の高さ、良好な日独関係や日本ブーム）、K地域において、日系国際児はより受容されていると考えられる。また、K地域には、補習校だけではなく、国際結婚者を主とする日本人・日系人コミュニティが存在するのに対し、M市には日本人・日系人コミュニティは存在しないことから、周囲は圧倒的にドイツ語・ドイツ文化の世界であり、そのなかで、日本語・日本文化を経験できるのは補習校等のみである。

（２）調査参加者の主な属性や特徴

①現地（インドネシアかドイツ）で出生している場合が多い。②現地校に通学すると同時に、幼稚部あるいは小学校から補習校等にも在籍している（在籍期間には個人差がある）。③日本人の親の現地語（インドネシア語、ドイツ語）は良好であり、外国人の親も程度の差はあるが日本語が多少は可能である場合

がほとんどである。④調査参加者すべてが日本への一時帰国を経験している（回数には個人差がある）。⑤日イ国際児の 35%、日独国際児の 32%が日本での長期滞在を経験している（留学、研修、仕事など）。また、将来的に日本における長期滞在を考慮している人も少なくない。⑦家庭の言語使用については、主言語は現地語の場合も日本語の場合もあったが、日イ国際児も日独国際児も、日本人の親は子どもに対して日本語を使っている。

（３）言語・文化の継承

①言語の継承：日イ国際児の場合は、程度には差があるが、全員が日本語とインドネシア語のバイリンガルで、3 事例（日本語が優位）を除き、インドネシア語が優位だった。日独国際児の場合は、ドイツ語のみの 1 事例を除き、程度には差があるが、日本語とドイツ語のバイリンガルであり、ドイツ語が優位だった。これは、「居住地の規定性」（ 鈴木、1997, 2008）と考えられる。日イ国際児も日独国際児も、現地語はネイティブと同等かほぼ同等なのに対し、日本語のレベルについては個人差が大きかった。

②文化の継承：程度には差があるが、日イ国際児も日独国際児も全員両文化の知識を習得していた。日イ国際児のうち、31 事例はインドネシア文化が優位（インドネシア人と同等は 2 事例のみ）、1 事例は両文化とも同程度、5 事例は日本文化が優位だった。日独国際児の場合は全員ドイツ文化についての知識の方が多かった（ドイツ人と同等は 1 事例のみ）。程度には差があっても、本調査参加者に、日本文化が継承されているのは、日本人の親が日本文化を伝えようとしていること、補習校等で日本文化について学んでいること、日本への一時帰国や長期滞在を経験していることによると推察される。

④文化（考え方・感じ方）の理解：日イ国際児も日独国際児も程度の差はあっても両方の考え方・感じ方を理解していた。日イ国際児の場合、23 事例はインドネシア人の考え方をより多く理解しており、9 事例（約 24%）は両方とも同程度（ネイティブと同等は一人）、5 事例は日本人の考え方・感じ方の理解が優位だった。日独国際児の場合は、ほとんどがドイツ人の感じ方・考え方の理解が優位だった（ただし、ドイツ人と同レベルではない）が、両文化（人）の考え方・感じ方の理解が同程度の事例もあった（ネイティブと同じ場合も含む）。

（４）文化的アイデンティティ

日イ国際児も日独国際児も「日系国際児」であることを肯定的に受けとめており、「国際児としてのアイデンティティ」を形成している（形成しつつある）と考えられた。また、文化的アイデンティティ（文化的帰属感・意識）は３タイプに分類された。タイプ I は両方の文化への帰属感・意識が同等（程度は多様）である。どちらの文化にも 100%所属していると感じている場合もあるし、両文化に 80%ずつの帰属意識がある場合もある。両文化に 50%ずつの帰属意識がある場合には、両方を加算すると 100%になるとも考えていることが推察された。タイプ II は日本への所属感・意識の方が高い場合であり、タイプ III は非日本文化への帰属感・意識が高いタイプである。日イ国際児も日独国際児もタイプ III が多かったが、日独国際児に比べ、日イ国際児には、タイプ II も多くみられた。タイプ II の場合には、両文化の間で文化的アイデンティティの葛藤がみられる場合もあった。また、日系国際児は主に思春期以降のどこかの時期で、文化的アイデンティティついて程度の差はあっても悩むことがあるが、時間の経過（成長）と経験によって、国際児である自身をさまざまなかたちで受容していくことが考察された。さらに、両言語と両文化の知識をバランスよく継承（習得）していることは、文化的アイデンティティの安定につながることも推察された。

（５）国籍選択

日イ国際児の約 65%がインドネシア国籍、30%が二重国籍であるが、日独国際児の場合は、ドイツ国籍を選択した 2 事例以外は二重国籍か国籍選択を保留中である。日イ国際児も日独国際児もどちらかの国籍を選択しなければならないことに対して大きな心理的負担を感じており、両国籍の保持できることを理想と考えていた。

（６）教育支援

①「国際児としてのアイデンティティ」の前提となる二言語・二文化の継承のためには、「一親一言語」は有用である。また、日本の祖父母の協力を得て、日本語を使用する機会（電話、Fax, E メール等）を増やすことは日系国際児の日本語・日本文化の継承を促進する。②補習校等に在籍することは、たとえその期間が短くても、日本への興味や関心を促すことになり、将来的に、日本語や日本文化の継承によりよい影響を及ぼす。③国際児の日本語力や日本文化の知識量は時間とともに変化するので、長期的な展望をもつ必要がある。日本への興味の持続が重要であることが示唆される。④日本における長期滞在（留学、研修、仕事など）は、日系国際児の日本語力および日本文化の知識を飛躍的に増大させるだけではなく、文化的アイデンティティ形成に有用に働く。⑤日本のコンピュータ・ゲーム、漫画、アニメーション等は国際児の日本語および日本文化の継承に大きな役割を果たすので（特にコンピュータ・ゲーム）、有効に活用することが望まれる。⑥日系国際児の心理的な安定や（文化的）アイデンティティ形成のためには、日本においても二重国籍を保持できるように検討する必要性がある。⑦居住地の条件を考慮した教育支

援はもとより、「国際児としてのアイデンティティ」を形成しつつある日系国際児であっても、個々の成育歴や年齢等によって、その様相は多様であるため、国際児が置かれた状況や個人の状態に合ったきめ細かな教育支援が必要であろう。

（７）今後の展望

①文化的アイデンティティ形成は一生続く過程であるため、時間の経過による、各調査参加者（日系国際児）の文化的アイデンティティの変化について、生涯発達的な視点からさらに考察していく必要がある。特に 10 代後半の日系国際児の場合は、発達過程の中で、今後の経験（日本での滞在など）によって、文化的アイデンティティが変化していく可能性が高いと考えられる。

②言語の継承に関しては、「居住地の規定性」が大きかったが、文化の継承（感じ方・考え方の理解を含む）については、そのほかの要因の影響も示唆されるので、今後、明確にしていかなければならないだろう。

③海外在住の日系国際児の場合は、母日本人・父外国人の組合せが圧倒的に多く、母外国人・父日本人の組合せは少ないが、後者も増えつつあるので、今後、両者の違いに着目した検討をおこない、さらにきめ細かな教育支援につなげていく必要性があるだろう。

＜引用文献＞

① マーフィー重松, S./坂井純子訳 アメラジアンの子どもたち：知られざるマイノリティの問題　集英社、2002
② 鈴木一代　日系インドネシア人の文化・言語習得：居住地決定との関連性について　東和大学紀要、第 23 号、1997、115-130
③ 鈴木一代 「国際児」の文化的アイデンティティ形成　―インドネシアの日系国際児の事例を中心に　異文化間教育、第 19 号、2004、42-53
④ 鈴木一代　異文化間心理学へのアプローチ　ブレーン出版、2006
⑤ 鈴木一代　国際家族における言語・文化の継承　―その要因とメカニズム　異文化間教育、第 26 号、2007、14-26
⑥ 鈴木一代　日系国際児のアイデンティティ形成とその支援のあり方に関する実証的研究　平成 20 年度-平成 22 年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書, 2011
⑦ 鈴木一代　海外フィールドワークによる日系国際児の文化的アイデンティティ形成　ブレーン出版、2008
⑧ 鈴木一代・藤原喜悦 1992 国際家族の異文化適応・文化的アイデンティティに関する研究方法についての一考察　東和大学紀要、第 18 号、1992、99-112

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 鈴木一代　日系国際児の文化間移動と言語・文化・文化的アイデンティティ　埼玉学園大学紀要（人間学部篇）、査読無、第 9 号、2011、75-88
② 鈴木一代　思春期の日系国際児の文化的アイデンティティについての研究　埼玉学園大学紀要（人間学部篇）、査読無、第 12 号、2012、89-92
③ 鈴木一代　グローバル化社会と多元的アイデンティティ：国際結婚者と国際児の場合　埼玉学園大学紀要（人間学部篇）、査読無、第 13 号、2013、97-106
④ 鈴木一代　バイカルチュラル環境と文化的アイデンティティ　－日独国際児の場合　埼玉学園大学紀要（人間学部篇）、査読無, 第 14 号、2014、15-28

〔学会発表〕（計 11 件）

① 鈴木一代　日系国際児のアイデンティティ形成とその支援　―国際比較 異文化間教育学会第 32 回大会　御茶の水女子大学（東京）、2011 年 6 月 12 日
② Suzuki, K. Acquisition of culture and language by intercultural children with Japanese ancestry: Asia and Europe. International Association for Cross-Cultural Psychology, Regional Conference, Istanbul(Turkey) , 03.07, 2011
③ 鈴木一代　ドイツの日独国際児たち：言語・文化と文化的アイデンティティ（ケース・パネル発表「ドイツ語圏の日系国際児たち －言語、文化、アイデンティティ、そして教育」）異文化間教育学会第 33 回大会　立命館アジア太平洋大学（大分）、2012 年 6 月 10 日
④ 鈴木一代　バイカルチュラル・パーソンとアイデンティティ：日系国際児の場合 日本パーソナリティ心理学会第 21 回大会　島根県民会館（島根）2012 年 10 月 7 日
⑤ 鈴木一代　日系国際児の言語・文化とアイデンティティ：文化間移動をしたきょうだいの場合（自主シンポジウム「多文化社会と教育心理学　―異なる文化的背景をもつ人々へのアプローチ」）日本教育心理学会第 54 回総会　琉球大学（沖縄）2012 年 11 月 25 日
⑥ 鈴木一代　文化の継承と文化的アイデンティティ：国際結婚家庭の子ども（国際児）の場合 日本発達心理学会第 24 回大会 明治学院大学（東京）2012 年 3 月 16 日
⑦ 鈴木一代　国際結婚者・国際児の多元的アイデンティティの様相（ケースパネル発表「グローバル化社会と多元的アイデ

ンティティ」）異文化間教育学会第 34 回大会　日本大学（東京）2013 年 6 月 9 日

⑧ Suzuki, K. Inheritance of language and culture in Japanese-Indonesian families. The 10th Biennial Conference Asian Association of Social Psychology, Yogyakarta (Indonesia), 24.08. 2013

⑨ 鈴木一代　多文化環境と文化的アイデンティティ　ー国際結婚家族の場合　日本社会心理学会第 54 回大会　沖縄国際大学（沖縄）2013 年 11 月 3 日

⑩ 鈴木一代　ヒンドゥ家族における言語と宗教の継承　ー父インドネシア人・母日本人の国際家族の場合（ケース/パネル発表「国際結婚家庭（国際家族）における日系国際児への言語および宗教の継承ーその要因とメカニズム」異文化間教育学会第 35 回大会　同志社女子大学（京都)、2014 年 6 月 8 日

⑪ Suzuki, K. Inheritance of language and religion in Indonesian-Japanese families living in Tokyo/Japan (Symposium "Transmission of language and religion among intermarried Japanese families: Cases involving Indonesians, Philippines and Turkish"). The 22nd of International Congress of International Association of Cross-Cultural Psychology (Reims, France), 18. 07. 2014

〔図書〕（計 1 件）

鈴木一代　ナカニシヤ出版　ボーダレス化した現代におけるナショナル・アイデンティティの問題　鑪勘八郎監修、宮下一博等編　アイデンティティハンドブック、2013、200-211

〔その他〕

Suzuki, K. Invited special lecture "Inheritance of language & culture, cultural Identity and cultural adjustment in intercultural/bicultural families." Udayana University, Denpasar (Indonesia), 05. 09. 2014

６．研究組織

(1)研究代表者

鈴木　一代（SUZUKI, Kazuyo）

埼玉学園大学・人間学部・教授

研究者番号：４０２６１２１８